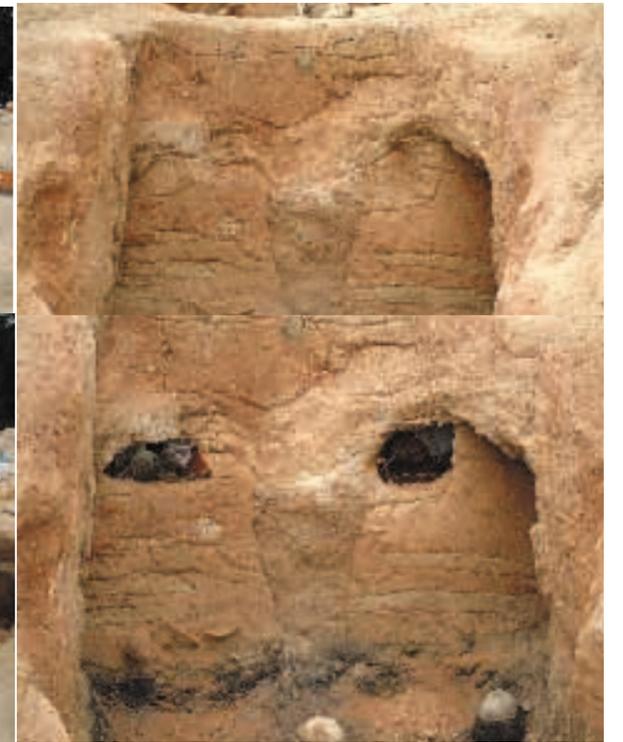
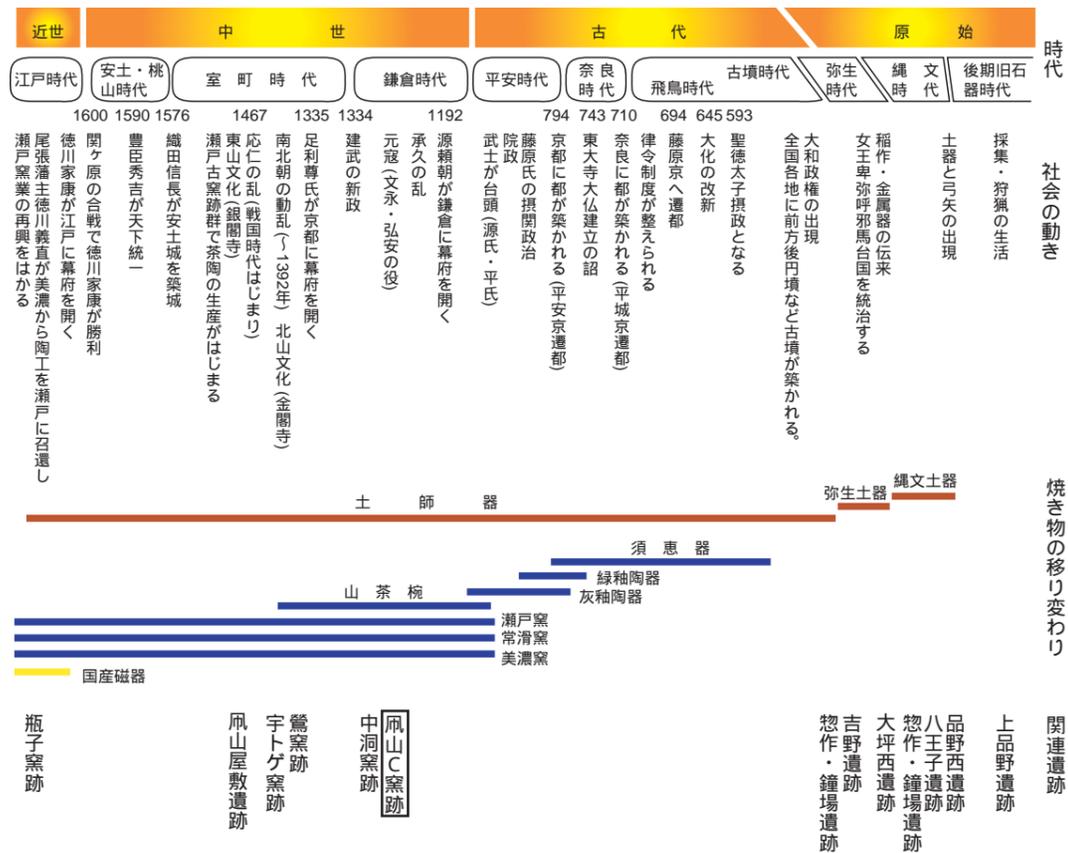
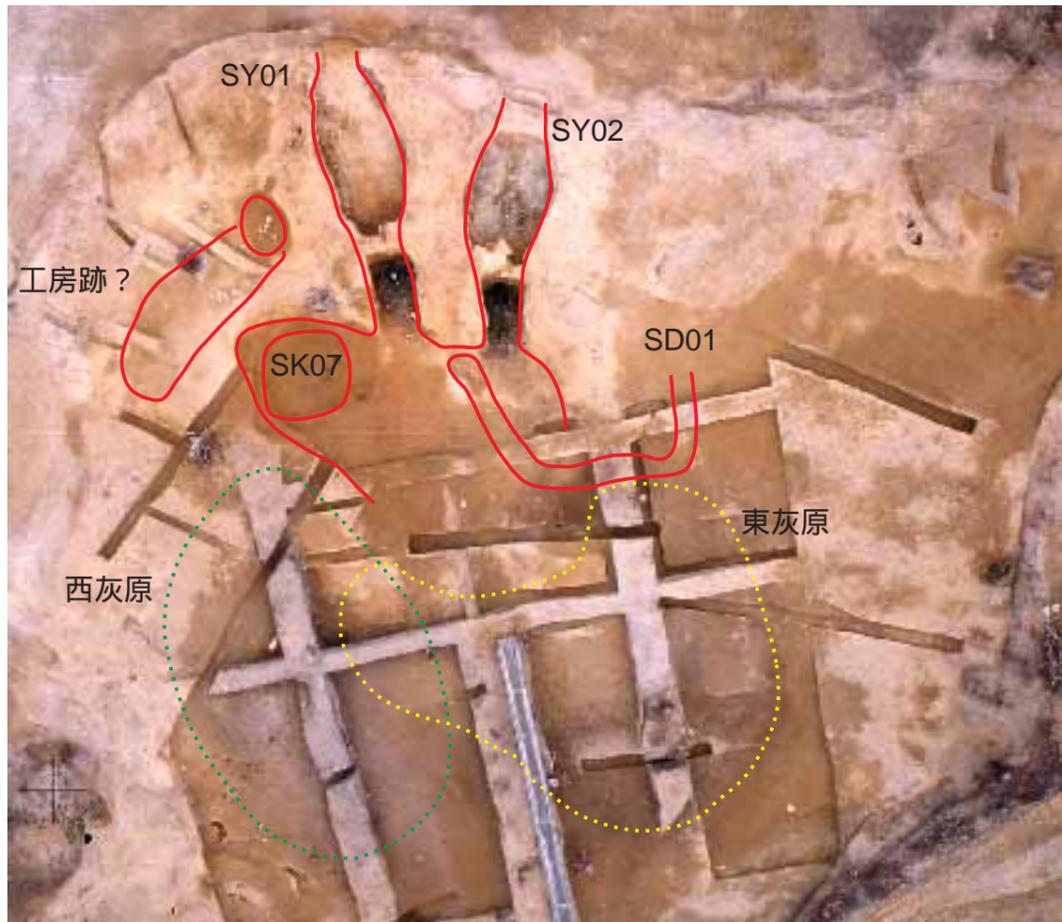


岡山窯跡

現地説明会資料



とき：2002.06.23
 ところ：瀬戸市岡山町内
 (財) 愛知県教育サービスセンター
 愛知県埋蔵文化財センター

<http://www.maibun.com>

尻山C窯跡とは？

「せとものまち」瀬戸市は、中世六古窯(瀬戸・常滑・信楽・丹波・備前・越前)のうち、最も栄えた生産地として知られています。中でも釉薬を塗った「古瀬戸」は当時の日本列島に広く浸透し、使用されました。

今回紹介する尻山C窯跡は、釉薬をつけない東海地方独自の灰釉系陶器(山茶碗)を焼いた窑窯跡です。

位置

尻山C窯跡は、瀬戸市の南東、約100ヶ所の中世窯がある赤津近辺に位置します。赤津川左岸より大目神社の脇、東へすすんだ谷のつきあたり、標高約230mの丘陵にあります。同じ谷筋には尻山窯(約700年前)、瓶子窯(約350年前)があります。

見つかった主な内容

窯体

窯体は2基見つっています。ともに天井部分は崩落し、焼成室の一部と煙道部が調査前に削られていましたが、ほぼ全形が明らかになりました。SY01分焰柱の部分は天井部が残り、眼鏡橋のように分焰柱を真中にアーチが観察できます。分焰柱は燃烧室から炎を分け、均等に熱を焼成室へ伝える役割をもち、また、焼成室へ製品を持ち込むための入口でもあります。その証拠に焚口から向かって右側のアーチの方が広く造られていて、人の出入りが可能です。

SY02分焰柱は半分崩落し、窯壁もSY01に比べもろく崩れやすい状態で見つかりました。焚口には遺物が所狭しとありました。焼成室から流出したか、あるいはSY01の廃棄場として利用したようです(写真右上)。

SY02の前庭部に溝(SD01)があります。当初の用途は不明ですが、SY02の操業が終わってから掘られた溝で、最終的にはSY01の廃棄

場として利用されています(写真右下)。

SY02焚口とSD01の廃棄場から、この2基はSY02が先に築かれ、その後SY01が築かれてたことがわかります。

工房跡(作業施設)

SY01の焚口から向かって左側の前庭部より一段高いテラス状の場所があります。作業施設の場所と考えられます。

灰原

灰原は大きく2ヶ所にあります。SY02寄りの東灰原は窯体を築く時に出た土(斑土)が2層、この斑土層の間と斑土層の上に1層、計2層の灰層を確認しました。SY01寄りの西灰原は3層の灰層を確認し、全体で5層の灰層が見つかりました。灰層は、1回の焼成に対して1まとまりの灰層が考えられ、窯を使用した回数を知る手掛かりとなります。したがって尻山C窯跡では、少なくとも5回の焼成が考えられます。

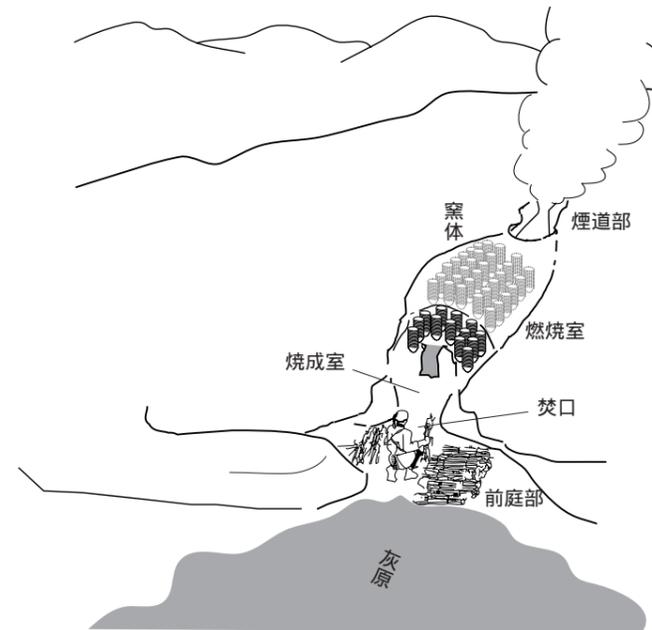
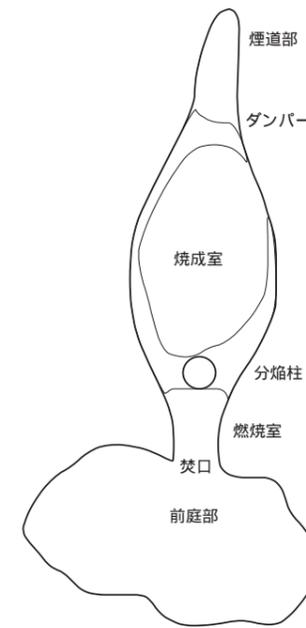
出土品

窯の中、前庭部、灰原から27リットル入る遺物入れ、コンテナにして約250箱の出土品が見つかりました。そのほとんどは、椀と皿の失敗品です。なかには灰をかぶって、15枚前後の椀がくっついたものも多くあります。

当時の優品である古瀬戸の瓶子や四耳壺も数点ありますが、おそらく他の窯で焼かれ、持ち込まれたと考えられます。なかには直径2センチぐらいの陶丸を焼くために再利用されたものもあります。



1610年尾張初代藩主義直が美濃国土岐郡から陶工を呼び、瀬戸の窯業生産の立て直しをしました。赤津には加藤利右衛門、仁兵衛がきました。



尻山C窯操業当時の復元図

用語説明

窯体 窯の本体を指す。尻山C窯跡では天井部分がすでになく、床面のみが残存していた。窯体の構造部位名については図を参照。

焼台 窯体燃烧室で、製品を水平に並べるために置く台。尻山C窯跡からは灰褐色のもろい塊として出土する。

工房跡 窯業生産に関わる作業施設。製品の製作場所、および焼く前の製品を貯蔵・乾燥する施設などの可能性がある。

灰原 失敗品や窯体内のかき出し物を捨て堆積した部分。黒色の強い層を数えると焼成回数が推定できる。尻山C窯跡の灰層は5層を数え最低5回の焼成が推定できる。

尾張型山茶碗 灰釉系陶器(山茶碗)は平安時代末頃から室町時代にかけて生産された東海地方独自の陶器。愛知県内では瀬戸をはじめ猿投、常滑などで生産され、これら尾張地方の灰釉系陶器を「尾張型山茶碗」と呼ぶ。その特徴は、器面が砂粒で粗く厚手。同時代に生産された東濃型山茶碗(多治見など)は器面が精緻で薄手。尾張型山茶碗は11型式に分類されており、尻山C窯跡で出土した灰釉系陶器はその7番目の型式に相当する。13世紀半ばに比定されており、今から約750年前の窯製品である。

窯のデータファイル

SY01：全長8.2m(現存長)、最大幅2.7m

SY02：全長7.2m(現存長)、最大幅2.6m

出土品 尾張型山茶碗第7型式椀・皿・陶丸
古瀬戸前期2～3期瓶子・四耳壺

尻山C窯跡と赤津焼

尻山C窯跡は2基の窯跡が比較的良好な状態で確認できました。中世瀬戸窯は6区にわけてその地区ごとの様子が明らかにされています。尻山C窯跡がある赤津区は約750年前から窯が築かれ、陶器を生産するようになったとされています。したがって尻山C窯跡は、見つかった製品の年代から、この赤津区では最も古い窯跡であると思われます。約200年間にわたり赤津区の窯業生産は盛んに行われますが、その後、生産地の中心が現在の岐阜県土岐市周辺になると、しだいに衰退していきます。現在の「赤津焼」につながる窯業生産は、江戸時代になってからとされています。

尻山C窯跡は「赤津焼」の最古の窯ではありません。しかし、赤津区の第一歩がこの地から始まったことは重要な窯跡の発見と言えるでしょう。

平安時代の終り頃から室町時代にかけて東海地方を中心に焼かれた器。前代の灰釉陶器の系譜を考えて「灰釉系陶器」とも呼ばれている。